論文

『救饑提要』における山口方言植物・海産物語彙（１）

Yamaguchi Dialect Vocabulary for Plants and Marine Products from the *"KYUKI TEIYO "*（Part1）

椙村知美[1]、池田史子[2]

要旨：

本稿の目的は、嘉永３年（1850年）、萩藩主毛利慶親（後の敬親）の命を受けて、布施御牆（ふせみかき）によって編まれた『救饑提要（きゅうきていよう）』に挙げられた救荒食物について検討し、その標準和名を比定することである。『救饑提要』における当時の山口方言特有の語及び中央語と同じ呼び名であるものを併せて、その全容を明らかにする。そのことで、日本人が度重なる災害を乗り越えるために利用してきた植物や海産物を知ることにつながり、不測の時代における持続可能な食文化継承の一助となる。

キーワード：『救饑提要』、救荒作物、山口方言

Abstract:

The purpose of this paper is to examine the famine foods listed in the *"KYUKI TEIYO."* It was compiled by Fuse Mikaki, a local magistrate in Ogori in 1850, under the order of the lord of the Hagi domain, Mori Yoshichika, whose name later changed to Mori Takachika. In addition, the documented items contained in it will be compared with the standard Japanese names. The *"KYUKI TEIYO"* includes a mixture of words unique to the Yamaguchi dialect of the time and words of the same form as the standard language. In this paper, they are summarized to give a complete picture. This examination will lead to a better understanding of the plant and marine products that the Japanese people used to overcome repeated disasters, and will also help to pass on a sustainable food culture in an era of uncertainty.

Keywords: *"KYUKI TEIYO"*, famine foods, Yamaguchi dialect

1.はじめに

飽食の時代と言われて久しい。我が国の食料自給率は長期的に減少傾向で推移しており、先進国中最低水準となっている（農林水産省）。海外からの輸入に頼らざるを得ない状況である。それに加えて、ここ数年を見ても新型コロナウイルスの流行に伴う物流への影響、ロシア・ウクライナ情勢、円安などの不測の事態が頻発している。そのため、今後は、食糧の輸入が突然停止してしまうリスクも想定して生活していく必要がある。終戦後の焼け跡の東京で野草に目を向けた金井（1946）は、「食用に適する野草は四季を通じて存在する。これをうまく利用すれば、よし主食の補ひとまではゆかなくとも、四季の食膳、蔬菜（そさい）に缺（か）くやうなことは無い筈である」としている。つまり、食糧難の時代は野草に目を向けていくように指南している。現代の食料飢饉として、溝田（2015）は、「日本では災害が起きるたびに救荒植物が重視されてきたし、わずか半世紀前まで救荒書はまだ実用書であった。東日本大震災以降は、『自然災害を生き抜く知恵を学びうる教材』として再認識され、新たな脚光を浴びつつある」と指摘している。

江戸時代後期の嘉永3年（1850年）、長州藩では、布施御牆によって、飢饉を生き延びていくための食物やその料理法を記した『救饑提要』が編纂された。その背景として、当時の長州藩内では、度重なる飢饉が到来し、食料危機が幾度も到来していた。

三輪（1938）によると、長州藩における天災は次のような状況であった。「藩政時代は非常に天災が多かった。殊に各藩とも鎖国主義を固守し、然も交通機関の極めて幼稚なる当時に於ては、一朝天災に遭遇すると其の被害程度は寔に大なるものであつた」。『救饑提要』が編纂された嘉永3年（1850年）6月1日にも、暴風雨による洪水が起きた。さらに、三輪（1938）では、天災の種別とそれに応じて藩がどのような対策を講じたか

[1] 基盤教育
[2] 国際文化学部文化創造学科

をまとめている。その中で、嘉永3年（1850年）までの災害の中で「飢饉」と書かれたものを抜粋すると、寛永19年（1642年）、明暦3年（1657年）、享保17年（1732年）、天明4年（1784年）、寛政5年（1793年）、天保8年（1837年）と、記録に残るだけでもこれだけ度重なっている。

その際の藩の対策として一例を挙げると、明暦3年（1657年）には、正月29日より4日間にわたり、飢民に粥を施し、他国への米雑穀の販売及び輸出を禁じた。中野（2000）は、特にひどかった飢饉として、享保17年（1732年）と18年（1733年）を挙げている。「既に17年から悪かった作物に続いて、18年の虫害で、予想以上の飢饉をもたらしたのである。いかに被害が大きかったかというと、当時の防長両国の人口が46万人であったという。その3分の１にあたる17万7千5百余人が餓死または病死したことになる」と述べている。大飢饉の享保17年（1732年）には、備荒貯穀を開き、飢人に一日米１合５勺の配給をしている。この時には、幕府から金２万両、米16,000石を借りて救済に充てた。

藩として、災害が起きるたびに救済措置を施してきたが、死者数の多さから推察すると、それらの救済措置だけでは飢えをしのぐことはできなかったのであろう。謝（2021）は、幕末「連年の饑饉を背景に、『救荒』は多くの本草家がもっとも関心を寄せた課題となった。本草家たちが自分の専門を活かして、『救荒本草書』を次々と出版した」と述べている。明和8年（1771年）には飢饉への対策として一関藩の藩医であった建部清庵が『民間備荒録』を出版した。60年後の天保4年（1833年）には、字の読めない人に配慮して、『備荒草木図』を出版している。天保4年（1833年）にはこの他、半井宋『忘飢草』なども発刊されている。江戸時代の主な救荒書をまとめた溝田（2015）によると、救荒書は、「天明および天保の飢饉の前後に集中して刊行されている」。天明の飢饉（1783-1784）後の寛政11年（1799年）には小野蘭山が『救荒本草記聞』を、天保8年（1837年）には伊藤圭介が『救荒植物便覧』を出している。

長州藩においても、人々が生き延びていくために、身近で、日ごろは口にしないものでも、いざというときには食べられるものをまとめておく必要があった。

2.研究の目的

『救饑提要』には、115種類の植物や海産物が、飢えを救う食物として掲載されている。本稿では、そのうち植物のみを取り上げ、海産物は次稿に譲る。『救饑提要』では、当時長州藩内で用いられていた植物名・海産物名がそのまま記載されている可能性が高く、当時の山口方言を知る上で貴重な資料だと考えられる。先に、江戸時代の本草書を方言資料として扱い検討したものに、二階堂（1989）や山本（2014）や前田（2020）がある。二階堂は、小野蘭山の『伊呂波別動植物名彙』に収録されている植物名の方言語彙を検討している。山本（2014）は近世米沢藩の救荒書における俚言性について考察している。前田（2020）は、食品の本草書である『庖厨備用倭名本草』から、長崎方言について検討している。

ところで、近世の方言資料として、『物類称呼』が挙げられる。『物類称呼』は、安永4年（1775年）に、俳人越谷吾山によって編集された江戸時代の方言辞典であり、多くの本草書からの引用も見られる。『日本語学大辞典』（2018）では、「本草と関係の深い＜動物・生植＞が、巻2動物138項目、巻3生植157項目、計295項目と『物類称呼』全体の過半を占めているとされる。貝原益軒『大和本草』（1709＝宝永6年）以来、品物の同定に方言名が重視された」と記載されている。同様に、本調査の対象語彙である植物や海産物にも、当時の方言名が多く掲載されていることが推察される。

『山口県のことば』（2017）によると、「山口県方言は大きく周防方言と長門方言の２つに分かれる。この状況は、語彙の面で顕著に表れている」としている。布施がいた萩は、長門方言、宰判時代の小郡は周防方言に属することから、長州藩内の語彙の差を認識した上で、一般の人により分かりやすく書き記したのではないだろうか。

山口県の方言をまとめた主なものに『防長方言資料第１輯 長門方言集』（1937）、『山口縣植物方言集』（1943）、『新訂山口県方言辞典』（1975）がある。これらに布施が書いた『他所問答』は参照されているが、『救饑提要』のことは書かれていない。また、江戸時代後期の山口の方言を知る手掛かりの一つとなる『救饑提要』を分析した論文は、管見の限りない。

本稿では減少傾向にある食料自給率の向上のための食文化継承の一助となるよう、『救饑提要』にある救荒食材を比定し、特に山口方言で書かれている植物名にはどのようなものがあるのかを取り上げ、検討することで、当時の植物名にまつわる山口方言を明らかにすることを目的とする。

3. 資料について

3.1. 著者について

著者の布施御牆は、『近世防長人名辞典』によると、次のような人物である。

> 布施御牆通称虎之助、初名貞幹又甕城、字は子足、夢齋又木公園と号す、萩藩大組士なり、仕官して検使役より郡代官を歴て地方右筆の劇職に至り晩に遠近方となれり。…中略…博学多識、深く藩の典故に通じ、また国典古記に精しく、毛利家の記録を整理し、また小郡宰判風土注進案を編纂す

『山口市近世史研究要覧』によると、宰判（さいばん）とは、「長州藩における郷村支配の中間組織として、一代官の管轄する区域（20～30か村）をいう」とある。同書には、布施が小郡宰判を、天保11年（1840年）3月11日から天保15年（1844年）9月4日まで任官されていたことが記されている。小郡宰判については、『小郡町史』（1979）にも次のような記述がある。

郷村の民政を統督するものを郡奉行といった。地方の郡村を区画して「宰判」といい、宰判ごとに代官を置いた。慶安4年（1651年）ごろ、支藩領域を除く本藩領内において18宰判となり、制度的にも整った。18宰判は幕末まで制度として踏襲されている。吉敷郡は北と南に分かれ、北は山口宰判、南は小郡宰判とした。この宰判へ、代官が出張して来て民政を取り締まる役所として、「勘場」一か所が設けられた。**図１**に示した通り、現在の山口市南部地域が小郡宰判の管轄であった。布施はこのあたりの地域の実情を調査し、小郡宰判の『防長風土注進案』をまとめたことになる。

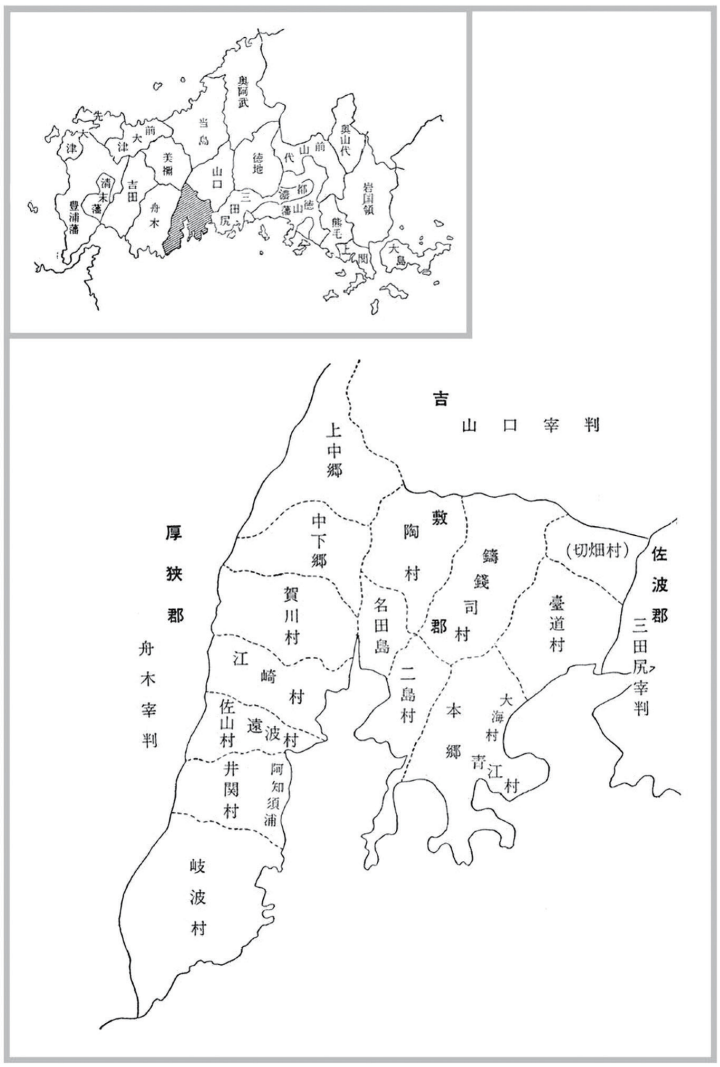


図１. 小郡宰判図 (出典：『防長風土注進案』1964)

3.2.『救饑提要』編纂の背景

『救饑提要』の元となったものに、『防長風土注進案14小郡宰判』（以下注進案）がある。『注進案』とは、五島（1990）によると、「江戸時代天保期の長州藩における地誌で、その記載は19世紀半ば、1840年ごろのものとされている」。『山口県近世史研究要覧』には「風土注進案は、長州藩の全領域11郡17宰判にわたり、本文395冊、古文書41冊に及ぶ圧巻である。その成立事情について総括的に述べると、本書は長州藩において、幕末の天保改革に関連して企てられた『国郡志』編修の地方資料として、藩内全域の町村から差し出された明細書き出しである…中略…幕府は天保12年正月、各宰判の代官役を通じて、管下の各町村浦島から一定の案書（編修項目）を示して実態調査の注進を命じた」としている。

凡例をみると、注進案本文はおおむね天保13年（1842年）に時点を置いて記述され、統計的事項もおおむねその前年の計数が掲げられている。ちょうど布施が小郡宰判だった頃に編纂されている。布施が小郡宰判管轄内を調べる中で飢えに苦しむ人が多く、『諸邑救荒扶食』として手立てを施す必要があった。小郡宰判時代に『注進案』の別冊として編纂した『諸邑救荒扶食』を参考にしつつ、度重なる災害や飢饉に見舞われた長州藩内に、小郡地域だけではなく広く『救饑提要』として伝えようとしたものかもしれない。

『萩市史』（1983）によると、嘉永3年（1850年）の災害は、次のようであった。

> 嘉永3年6月1日、萩町はまたも大洪水に見舞われた。…中略…この6月の水害復旧のめどもまだ立っていないとき、8月7日にまたも大風雨が両国を襲った。同月15日、藩主敬親は郡奉行・代官を集め、当面する民政について緊急指示を発した。

藩主敬親の発した指示の内容の一つが、山野の食用野草を示すことであった。嘉永3年（1850年）8月15日の「口達控」が、『諸沙汰物御書渡類』の中に含まれている**（添付資料１）**。その中に、「小躬之ものハ山野之内何ニ不寄食料之助ニ可相成品取用い候様」とある。明治以降に、毛利家敬親と元徳父子時代のことをまとめた『忠正公傳』の中にも、同様の記載がある。

また、長州藩主の参勤帰国動静を田村（1981）はまとめている。それには嘉永3年2月18日慶親江戸発～3月22日萩城着、嘉永4年3月5日慶親萩城発～4月9日江戸着とある。ちょうど萩滞在中に災害に見舞われた。被害状況を目の当たりにし、惨状を把握した上で指示を出している。

小郡宰判の『注進案』について山口県文書館編（1983）にも、「村志の記述の他『諸村救荒扶食』の１冊が特色であるが、布施御牆によって別途に編集され、嘉永３年杞国于叟山田亦介の序を付し、『救饑提要』と題して刊刻されていることを付言する」とある。布施は藩主の命を8月15日に受けて、以前編纂していた『諸邑救荒扶食』を、『救饑提要』として提供し、早急に救荒食材を人々に提示しようとしたと考えてよいだろう。

『救饑提要』は、明治期以降『雑集』（戦前）や村田峯次郎が自費出版で編集した『長周叢書』（1891）の中に、『童子先誦』『他所問答』とともに所収されている**（添付資料２）**。

広田（1974）は、毛利家の歴史編纂事業についてまとめているが、村田峯次郎も明治期に入り萩から東京に転居したのちに毛利家の資料の編纂に当たっていた一人である。編纂事業は、藩校明倫館付属の編輯座で行われていたが、明治6年（1873年）に「山口用達所」の編輯座に統合された。明治16年（1883年）には東京移転命令が発令され、翌17年（1884年）には資料も東京へ運び出された。東京では、明治16年（1883年）から昭和22年（1947年）までの間、「編輯所」として毛利家の編纂事業が継続して行われていた。

4. 調査結果

4.1. 調査対象語

『救饑提要』の中に、「飢を救ふ食物」として、115語が掲載されている。これら115種類の救荒食物は、当時も、平常時はそれほど食されていなかった部位や食材だと考えられる。

五島（1989）は、天保期の平均的な長州の1人1日あたりの食料供給量と栄養素供給量を明らかにしている。これには、「エネルギーの総量は1,861kcalであり、そのうち1,608kcal（86.4%）が穀類から、ついで豆類（4.5%）、イモ・でんぷん類（4.4%）から供給されていた。天保期において、穀物中心の食事であったことがわかる。コメは1,046kcalを供給しており、全エネルギーに占める割合が56.2%であり、コメは階層差、地域差があるとはいえ、広く食べられていた」とある。飢饉の際には、穀物の収穫が先行して激減することから、摂取エネルギーを「救荒食材」で補っていくことになる。入手困難なものではなく、生活圏に身近にある植物であり、誰もが知っているものを日ごろから想定しておくことが重要になる。

『救饑提要』には調理法なども載せられていたが、今回は語彙だけを分析対象とする。漢字表記が少なく箇

条書きで書かれており、葉や根など、植物のどの部位を食べることができるのかを分かりやすく示されている。広く一般の人が読めるようにという配慮が見て取れる。

また、「すぎな」の下に「つくしのめだち」と小さく書かれている。この他に、「そら豆のは」の下に「とうまめ」「てんぢくまめ」、「にれの根かはは」は「小ねり」、「夏はぜのみ」は「犬きず」、「狐のきず」、「つぶりはげ」、「いちご」は「土いちご」、「いわしやかずのは」は「かさな」と書いてあるのは、当時から長州藩内においても多様な呼称が存在していたことが推測される。

川名（2022）は、「人々は暮らしを送っていく中で、とあるものを他のものと区別していく際に命名という方法を頻繁に用いていた。これは和名のような通称が認知されづらかった、山野のごくありふれた植物に対してはよく行われていたことであったといえる」としている。特に、小さく添えられた名称は、方言名を記すことで、より身近な呼称によって認知度を高める工夫を施した可能性が高い。次節では、まず『救饑提要』に挙げられた植物を比定し、その標準和名を示す。

4.2 標準和名及び分類について

まず、この115語のうち植物である100語が標準和名で何に当たるのかを明らかにする。植物名の見出しは、『救饑提要』の原文に従い、ひらがなや漢字表記を用いる。標準和名と辞典類掲載語はカタカナ表記とする。

その他に、『防長風土注進案』、『山口県方言辞典』、『近世産物語彙解読辞典』、『山口県の植物方言集覧』、『やまぐちの薬草』、『やまぐちの薬草カラー図鑑』、『山口県植物誌』、『山口縣植物方言集』、『山口県植物方言集拾遺』、『ふるさと山口江戸時代の動植物図』、江戸時代の救荒植物を集めた東邦大学理学部生命圏環境科学科保全生態研究室及び日本国際湿地保全連合が共同で作成したデータベース（以下「救荒植物データベース」）を基に標準和名の選定を行った。

『ふるさと山口江戸時代の動植物図』の中には、「長門国産物之内江戸被差登候地下図控」「周防国産物之内絵形」「長防産物名寄」（両国本草）が掲載されている。救荒植物データベースにおいては「救荒本草」「救荒野譜（和刻本）」「備荒草木圖」「艸木食法　救餓録」「救荒草品圖譜」が収録されている。

植物の科の分類和名については、公益財団法人高知県牧野記念財団と株式会社北隆館が作成した『牧野日本植物図鑑』（1940）と『同増補版（訂正版）』（1956）の全頁が掲載されたデータベースを使用した。従来、植物の分類は、エングラーやクロンキストなどの分類学者によって主に形態形質の類似や共有性にもとづいてまとめられてきた。しかし、近年、DNA（あるいはRNA）の塩基配列の変異をデータとして描いた系統樹に基づいたAPG分類体系も行われるようになった（邑田 2014）。しかしながら、本稿では、過去の時代に存在した植物については、まずは伝統的な分類法での確認を優先させようと考え、『牧野日本植物図鑑』（1940）と『同増補版（訂正版）』（1956）による、従来多く用いられてきたエングラー体系の分類を確認することにした。

標準和名と同じ語形であるものは、43語であった（スイバは重複して立項してあるので1語と数える）。それに、「そらまめ」「すぎな」「なつはぜ」の標準和名部分と、標準和名に近い「つわ」「にれ」を加えると48語が現代の標準和名と同じ語形だった。半数近くは標準和名と同じ語形であり、当時から中央語と語形の違いがなかったと思われるものである。

掲載されている植物は、マメ科（14種）が最も多く、次いでユリ科（11種）、キク科（6種）と続く。佐合（2012）は草本の植物種を科ごとに分けて比較しているが、「救荒植物は雑草とやや異なってイネ科、カヤツリグサ科が少なく、キク科、ユリ科、マメ科の草種が相対的に多かった」とし、『救饑提要』でも同様の結果であった。

以下、分類するにあたり『日本国語大辞典』の記述例を任意に示す。

標準和名と同じ語形の例

１）**だいず[…ヅ]【大豆】**〔名〕マメ科の一年草。中国北部原産といわれる。古代から中国では五穀の一つとして栽培され、日本にも古く伝来した。現在では、世界中で栽培され、品種数は一〇〇〇を超える。

標準和名と異なる語形の例

２）**はな‐がら**〔名〕植物「つゆくさ（露草）」の異名。

＊日葡辞書〔1603～04〕「Fanagara （ハナガラ）〈訳〉藍色の花の咲く、このように呼ばれる草」

〔方言〕（1）植物、つゆくさ（露草）。《はながら》木曾†091勢州†039**周防**†122群馬県勢多郡236埼玉県入間郡054秩父郡251千葉県印旛郡054東京都八王子311新潟県佐渡356山梨県南巨摩郡463長野県下

伊那郡492佐久493静岡県524島根県隠岐島725**山口県豊浦郡**798**大島**801福岡県田川郡964長崎県対馬964熊本県929 936 964大分県速見郡941直入郡964鹿児島県甑島・硫黄島964《ながら》埼玉県秩父郡251

4.3 山口方言名での記載について

『救饑提要』に標準和名と同じ表記で書かれている下に小さく載っている「とうまめ」「てんぢくまめ」「つくしのめだち」「小ねり」「犬きず」「狐のきず」「つぶりはげ」「土いちご」「かさな」についてはすべて山口方言として**表２**に示したように『長防産物名寄名彙』や『日本植物方言集成』に記載されていた。より分かりやすく正確に伝えるために、敢えて方言名を載せたのだろう。「いわしやかずのは・かさな」については、『日本国語大辞典』や『日本植物方言集成』にゴンズイの山口方言として「いわしやかず」が記されており「いわしやかず」もゴンズイの山口方言だということが明らかとなった。

また、**添付資料３**のスズメノテッポウ（ひらくさ）を見ても分かるように、当時から山口県内でも特に周防と長門の語彙の差は認識されていたと見受けられる。**表２**に主要な辞典類として『長防産物名寄名彙』『物類称呼』『日本植物方言集成』『日本方言大辞典』『日本国語大辞典』を挙げる。『救饑提要』の語彙に対して複数の植物候補があるものについて以下に考察を行う。

4.3.1 標準和名が同じ植物

4.3.1.1 濵ぢさと濵あかざ

『長防産物名寄名彙』の周防に、「濵ぢさ」と「濵あかざ」はどちらも「和名ツルナ」として載っている。中西（2018）によると「ツルナ（ハマヂシャ）」となっており、「和名はつる状に茎が伸び、葉が食べられることからつけられた」とある。九里（1973）にも「ツルナ」の異名として「ハマヂシャ」があり「海浜砂地に特産の野草であるが、一般の土質によく適応し、またその草性は凶時食糧としてすでに広く栽培せられ、食膳に供せられている」とある

一方、「ハマアカザ」は、標準和名として載っている植物である。どちらも海岸近くで育つ植物という共通点はあるが、別の植物として捉える。

4.3.1.2 「くわんぞう」と「志ようび」

「しょうび」は、『日本植物方言集成』では「イヌガヤ」、「カンゾウ」、「ヤブカンゾウ」で出てくる。「イヌガヤ」は、山口県の方言ではない。『山口県の植物方言集覧』にも、「ヤブカンゾウ」の方言として「ショウビ」（防州方言―本草綱目啓蒙）とある。『やまぐちの薬草カラー図鑑』（1993）にも、「ヤブカンゾウ」はユリ科ワスレグサ属であり、薬用名を**萱草**という。同書の中で「古い時代に中国から渡来した有史前の帰化植物で、食用、薬用の目的で栽培されたものが野生化したとみられる。…中略…中国では同属のホンカンゾウを忘憂草といい、『忘れる』に萱の字を当て萱草の名がついた。そのことからヤブカンゾウをワスレグサともいう」と記載がある。

『日本植物方言集成』に、カンゾウは萱草と甘草の二つあるが、萱草は前述の通り「志ようび」を当て、「くわんぞう」は**甘草**を指していると推察される。

4.3.2 同一の呼称があるがそれぞれ別の植物であるもの

4.3.2.1 「野ひる」と「もめら」

『日本国語大辞典』で「もめら」と引くと、「ノビル、ツルボ、ムクゲ、ヒガンバナ」の項目がある。「もめらのね」とありムクゲは別項目で葉を食すとあることから、「もめら」ではない。『日本植物方言集成』には「ノビル、ツルボ、ヒガンバナ」すべてにおいて山口県で使用されている。また、他の3つは共通してユリ科の植物であり（**表１**）、ノビルとヒガンバナは分類よってはヒガンバナ科に属するため、系統の近い植物である。

篠木（2007）には、「ヒガンバナに魅せられた人も多く、ヒガンバナの方言語彙数も飛び抜けて多く、千を超えるという…中略…ヒガンバナの方言は、近畿・中国・四国・九州西北部に極めて多いことが分かる」と述べていることからも、身近でさまざまな呼称があったことと言える。

図２より、山口県東部や福岡県北部あたりにヒガンバナを「モメラ」と呼ぶ地域があることが分かる。『両国本草』には、「もめら」を周防では「つるぼ、さんだいがさ」と呼ぶとあった。ヒガンバナの別称である石蒜には「シビトバナ、牛モメラ、長ニドクモメラ、防ニナツスイセン、鬼モメラ、マンジュシヤゲ、入道モメラ、センサイガウロ、マンギシヤ」と数多くあり、「もめら」のみの記載はなかったものの、鳥谷（2016）は

「特に西日本に俚言形が多いことが予測されたわけであるが、実際に東西境界線の西側で多いといえよう」としており、前述の篠木（2007）と同じ見解である。

篠木（2007）によると、「先にヒガンバナを食べていたであろうことを語る方言名をみたが、中国、四国、九州には、それらの名よりもさらに＜食べていた＞ことに近づく名があり、それは同時に、古代語に近づく名でもある。それは『すびら』や『毒すみら』や『もめら』。ノビルと同じ「ひる」に繋がる可能性が高い」としている。「もめら」は古い言葉であり、「ノビル」とも近い植物であることが分かる。小川（1978）にも、「単にモメラと言っている地方は山代地方を始め室積、船木等であるのを見ると、これはたぶん彼岸花の古語であろう。山代地方のような山間諸村にこの系統の方言が群をなして濃厚に保存せられていることは甚だ興味がある」とあり、「もめら」がヒガンバナの古語であり、山口県内でも1978年ごろには山間部にまだ残っていることが分かる。

一方で、佐合（2012）はツルボについて、「古語にスミラと称し、天明の飢饉において多少に採食された」とある。「すみら」は前述に「毒すみら」というヒガンバナの古語であり、ツルボの古語と同一名称である。

厚狭においては3種類とも「もめら」としての使用があり、ノビル、ツルボもヒガンバナともに根を食すことができ、地域や時代によって混同して使用されていた可能性が高く、今回の調査ではどれを指すのか断定できなかった。

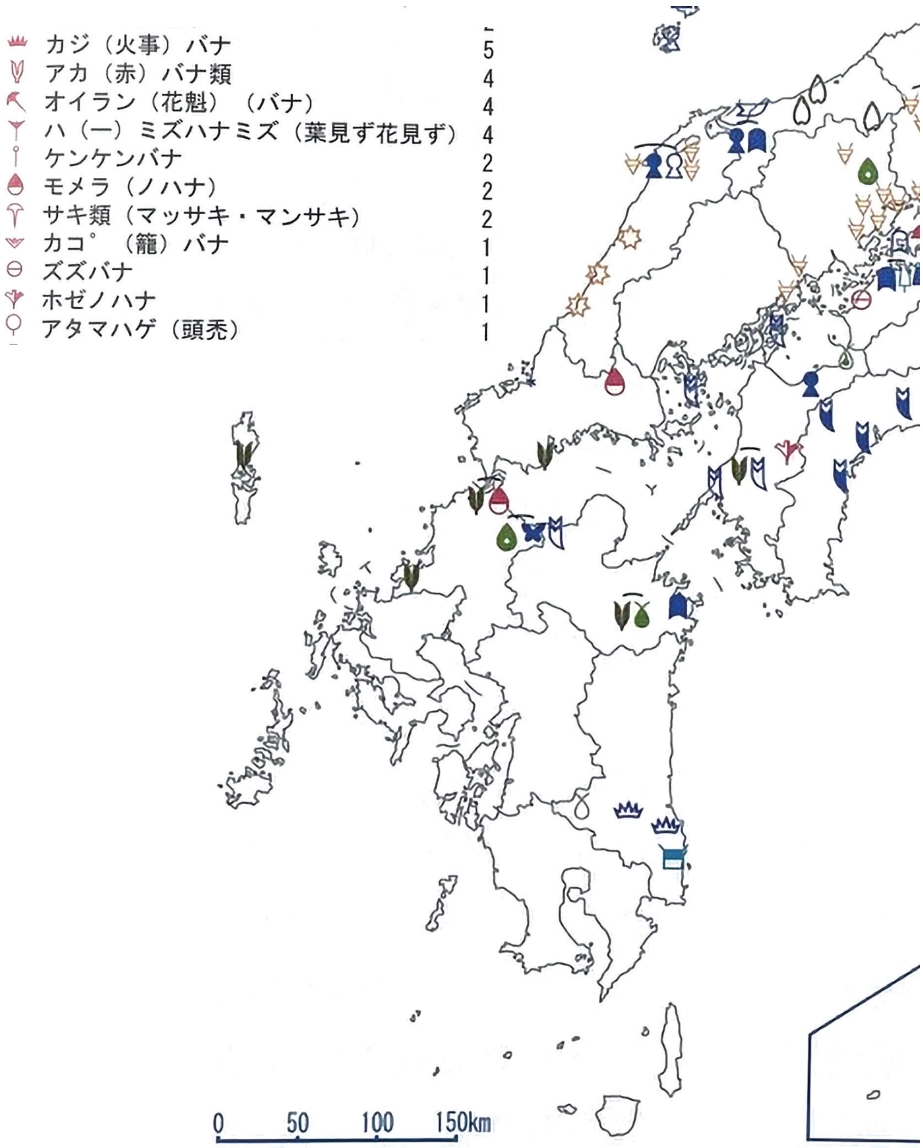


図２.「ひがんばな」の方言分布（大西 2016）を引用者が改編

4.3.2.2 「とりのした」と「ゆきのした」

「とりのした」は『ふるさと山口江戸時代の動植物図』には和名は記載されていなかったが、「こごめひづり」、「ほとけのひつり」、「こめな」、「こめくさ」など呼称の多い植物である。

『両国本草』を見ると「雀舌草」とあり「トリノ舌、コメ草」と記されていた。「雀舌草」は「ノミノフスマ」に当たる。『日本植物方言集成』には「ユキノシタ」も「ノミノツヅリ」も「とりのした」の呼称が記載されており、どちらも山口県で使用されている。

続いて、「ノミノツヅリ」と「ノミノフスマ」について『日本方言大辞典』の標準語引き索引を見ていく。

３） **のみのつづり**【蚤綴】

［標準語索引／植物］

あせものぐさ／いとはこべ／こめぐさ／こめな／とりの舌

４）**のみのふすま**【蚤衾】

［標準語索引／植物］

こごめ／こごめぐさ／こめぐさ／こめな／ひずる／ほたろぐさ／ほとけのひずり

「こめぐさ」「こめな」は共通しており、なおかつ「ノミノツヅリ」は「とりの舌」の使用がある。

『日本植物方言集成』には、「ノミノフスマ」の「とりのした」での呼称はなかったが、「こごめぐさ（長門）」は記載されている。『牧野植物図鑑』では、「ノミノフスマ」の漢名として「雀舌草（誤用）」とされており、近世では「ノミノフスマ」を「雀舌草」として誤認識されていたのではないだろうか。

『近世産物語彙解読辞典』において、「とりのした」は樹木類に記載があり、少なくとも近世で使用されていた言葉であることは確認できた。

『日本国語大辞典』における「ノミノフスマ」は以下の通り。

５）**のみのふすま**【蚤衾】〔名〕

ナデシコ科の一、二年草。茎は叢生し高さ五～二〇センチメートル。葉は長さ一センチメートル内外の長楕円形で対生する。春から夏にかけ、葉腋に白い小さな五弁花が咲く。花弁は先が深く二裂する。漢名天蓬草で、雀舌草は中国産の同属の植物の名。のみのすま。学名はStellaria alsine var. undulata 《季・春》

＊物品識名〔１８０９〕「のみのすま　ノミノフスマ　雀舌草〕

＊日本植物名彙〔１８８４〕＜松村任三＞「ノミノフスマ　雀舌草」

「ノミノフスマ」が「雀舌草」と書かれているが、誤用だとすると、『救饑提要』の「とりのした」は「ノミノツヅリ」が有力である。

4.3.2.3 「おばこ」と「ぎぼうし」

『山口県方言辞典』に、「ぎぼうし」の呼び名として「おおばこ」がある。『山口縣植物方言集』に、「ぎぼうし」と引くと「ぎぼし」として全県で広く使われており、「ぎぼうし」を「おばこ」というのは光のみである。一方『山口縣植物方言集』には、「おほばこ」は全県「おばこ」という言い方が分布しており「ぎぼうし」としての記載はない。

『両国本草』には、車前　おばこ大小2種　玉簪花　ぎぼうしとある。

簪の異体字は簪である。「玉簪花」は「ぎぼうし」のことである。『両国本草』でも「おばこ」と「ぎぼうし」は別種であることから、本稿でも同様に別種と捉え、「おばこ」は「オオバコ」、「ぎぼうし」は「ギボウシ」とした。

4.3.3 立項してあるが同じ植物指しているもの

4.3.3.1 「いのこづち」と「ごしつ」

「いのこづち」は現代では「イノコズチ」と表記されている。「イノコヅチ」が掲載されているものに『救荒野譜』がある（**図３**）。王西樓・姚可成によって著され、松岡玄達が享保1年（1716年）に刊行した、『救荒本草　和刻本』に掲載されている植物の名称である。

図３のように山牛膝（イノコヅチ）と書いてあることからも「いのこづち」と「ごしつ」は同じものではないだろうか。「ごしつ」は漢字で「牛膝」と書き『日本国語大辞典』ではイノコズチの漢名、また『長防産物名寄』の周防に濁音ではないが、「こしつ」で「イノコズチ」と出てくる。『やまぐちの薬草カラー図鑑』にも、「イノコズチ」の薬用名として「牛膝（ごしつ）」とある。

そのため本稿では同一の植物として扱う。

図３．『救荒野譜』より「イノコヅチ」
（救荒植物データベースより）

4.3.3.2 「ぎしぎし」と「志のは」

『日本植物方言集成』では、「しのは」の標準和名は、「ギシギシ」「シソ」「スイバ」「フダンソウ」となっている。その中で山口方言として記載があったのが「ギシギシ」である。『長防産物』にも「しのは」は「ぎしぎし」として載っている。別項目に「ギシギシ」はあるが「志のは」も「ギシギシ」と解釈する

4.3.4 一つの言葉に複数の植物の呼称があるもの

4.3.4.1 「ところ」

『長防産物名寄』には、「ヒメドコロ」、「オニドコロ」とありどちらもヤマノイモ科に属する植物である。『防長風土注進案』では長門市や旧豊北町あたりの物産として「トコロ」が挙がっていた。『山口県の植物方言集覧』には、「県産のトコロ類の主なものにはオニドコロ（トコロ）、カエデドコロがあり、同一方言で呼ばれる」とあり、複数の植物に対し「トコロ」と使用している。『山口県方言拾遺』には「むかご」のことをガガイモ（上関・山口）トコロ（美祢於福）としている。『山口縣植物方言集』には「ガガイモ」を「トコロ」と称するとして（佐波八坂）と記されている。

佐合（2012）には、「トコロ」を「オニドコロ」とし、「虚弱な人は多くはたべてはいけない。日常の野菜ならびに救荒用とする」とある。九里聡雄（1973）『食用野草』にも、「オニドコロ」の異名として「ナガドコロ」、「トコロ」が挙げられており、分布は本州・四国・九州である。「オニドコロ」を指していると推察されるものの、他を完全には否定できない。

4.3.4.2 「まつぐいめ」

表２より、「まつぐいめ」として「アキグミ、マツグミ、ヤドリギ」の記載があり、『山口縣植物方言集』に、「ヤドリギ」が「マツグイメ」（大島・岩国）として掲載があり、参考文献に挙げている中にはこの他に記載がなかった。『両国本草』には「寄生…松ニ生ルヲマツグイメ」とあり、『日本方言大辞典』にも「マツグミ」の方言名としての記載があることから、「マツグミ」を指していると推察される。

4.3.4.3 「いもぎ」

『山口県方言拾遺』には、「コシアブラ」のことを「いもぎ（厚狭）」とあるが、『日本方言大辞典』『日本植物方言集成』『両国本草』のすべてに、「タカノツメ」「コシアブラ」どちらも山口県の使用が見られる。

4.3.4.4 「すいば」

「すいば」は、同じ平仮名表記で2か所立項されていた。「スイバ」の説明として、山口薬剤師会（1993）には、「全体に多量のシュウ酸を含み、かむと酸っぱいから酸っぱい葉→スイバとなった…中略…よく似たギシギシは根もとの葉に長柄があり基部が心臓系、上の葉は柄がなく茎を抱かない」としており、「ギシギシ」とよく似た植物であることが分かる。その他「すいば」の使用として「カタバミ・ムラサキカタバミ・イタドリ・ギシギシ」が挙げられる。しかしながら、『山口県の植物方言集覧』の記述をみると、「ムラサキカタバミ」は南米原産の帰化植物スイバ（各地）として山口県内で使用されている。「ムラサキカタバミ」が観賞用として日本に侵入したのは、文久年間（1861～1863年）であり（国立環境研究所侵入生物データベース）、ここで言う「すいば」が「ムラサキカタバミ」である可能性はほとんどないと言ってよい。

『山口県の植物方言集覧』の「イタドリ」の説明の中に、「子供たちは若い茎を食べたり（酸味がある）、草花遊びに利用したため方言名もこれに由来するものが多い」とある。「カタバミ」は『牧野植物図鑑』に、「茎及び葉ニ蓚酸ヲ含ミ酸味ヲ有ス」と記載され、「カタバミ、イタドリ、ギシギシ」は酸っぱい葉であることが共通しており、酸味からきた方言である。

「ギシギシ」と「イタドリ」は別に項目として挙がっているため、「すいば」は「スイバ（酸葉）」と「カタバミ」を指していると推察される。

4.3.4.5 「たみのの實」

「たみのの實」については、『長防産物名寄名彙』のみ記載があった。和名は「ミノゴメ」と記されていたが、『日本国語大辞典』には、『むつおれぐさ（六折草）』の別名、「かずのこぐさ（数子草）」の異名とあり、鋳方（1977）においても、「言語学者であった大槻・金沢両博士は、従来ミノゴメと称されていたカズノコグサにみの（みのごめ）を当てられたと思われる」とし、『日本国語大辞典』同様国語辞典類ではミノゴメがどちらを指しているのか分からない。

古くは『延喜式』にも使用例が見られる。『延喜式』の一部を下記に示す。

> 践祚大嘗会の解斎の七種の御粥の料
> 米・粟・・稗子（ひえ）・蔓子（みの）・胡麻子（ごまのみ）・小豆各二斗…

この七種の粥の穀物の中で蔓子だけが栽培されておらず、鋳方（1977）は、「蔓子が祭祀あるいは儀式的穀物であり、その故に栽培されないままの穀物－端的にいえば野生の穀物－であった」という見方をしている。延喜式では珍重されていた蔓子も、近世終わりころになると日常生活の中で一般的に食されるものではなかったこと分かる。七種の粥について分析した森田（2010）は、「七種の御粥は、儀式の種類により穀物の混合割合及び塩の分量は異なるが，穀物の種類は「米コメ ・粟アワ・黍子キビ・稗子ヒエ・蔓子ミノゴメ（ムツオレグサ・タムギ）胡麻ゴマ・小豆アズキの七種で一定であった」とあり、蔓子はムツオレグサと書かれている。

愛媛県農業試験場の研究報告の中に、以下のような記述がある。臼坂・木村（2003）は、「本県の裸麦は主に水田裏作に導入されているが、近年生育後期において、スズメノカタビラやカズノコグサが雑草し、収穫作業の阻害や減収する事例が多くみられる」としており、穀物栽培にとってやっかいな雑草として捉えられている。

鋳方（1977）は、ミノについて以下のように述べている。

> 蔓子を除く五穀－稲・粟・黍・稗・胡麻・小豆－は、古くからの栽培植物であり、七種の粥と関連ある儀式が廃れても、引き続き栽培されたことはむしろ当然であった。人々の食生活に重大な関係があったからである。これに対し、最初から野生植物であり、人々の食生活と無関係であった蔓は、中世以降、7種の粥と関連がある儀式がようやく廃されるに伴って、その名さえ忘れられるに至ったのではあるまいか。『和漢三才図会』や『草木六部耕種法』に、蔓が記されてなかった理由が恐らくこの辺にあったと思う。
>
> なお、蔓が野生植物であったとすれば、僅か1000年足らずの間に絶滅したとは考えられない。野生植物が気候風土に変化がないかぎり生き続けるという立場をとるならば、今のところ、一応現在のむつおれぐさあ

たりに莖を当てるべきかもしれぬ

上記のように、鋳方（1977）は、「ムツオレグサ」を「ミノ」に当てている。邑田・米倉（2017）では、「ムツオレグサ（ミノゴメ・タムギ）イネ科本州から琉球の水田や溝の中に繁茂する多年草で叢生する…中略…食用とする人もある。（日本名）ムツオレグサは、ばらばらに折れ易い意味で脱落し易い穂に基づいた名であり、ミノゴメは、みの米の意だがみのの意味は不明、田麦は田んぼの麦の意味で、食べられる穀粒という意味である」と説明している。

同書のカズノコグサの説明では、「カズノコグサ（ミノゴメ）イネ科水田中および田の畔等に多く生える二年草で鮮緑色…中略…（日本名）数の子草は小穂の並列する状態があたかも数の子（ニシンの卵塊）に似ていることに基づいて牧野富太郎が命名した。この草の殻粒は外廓をなしている苞穎の大きいのにかかわらず極めて小形で食用にならない、従来この植物をミノゴメと呼んでいたが、本当のミノゴメはムツオレグサのことである」としている。

両者の見解から、「ミノゴメ」は「ムツオレグサ」であるため、「たみのの實」は「ムツオレグサ」であると解釈する。

4.3.4.6 「ゆり」類

ゆり類は、「ゆり」以外に、「ささごうら」「るりのね」「ごうろ」と４種掲載されている。佐合（2012）に、「救荒植物として、ユリ科はキク科についで多く、昔から重要なものであったと思われる」とある。この他に『救饑提要』には、ユリ科に分類されている植物は「のびる」「ちもとこ」「もめら」「かつら菜」「ゑんみ」「志ようび」など11種類載っている。『日本国語大辞典』に「ユリ」は以下のように記述してある。

ユリ科ユリ属の植物の総称。地中に、白・淡黄または紫色の鱗茎がある。葉は線形または披針形。春から夏にかけ、大きな両性花が咲く。花は六個の花被片からなり、赤・桃・白・黄・紫色など。雄しべは丁字形の葯（やく）がめだつ。ヤマユリ・オニユリなどの鱗茎は食用ともなる。

『救饑提要』の「ゆり」は何を指しているのだろうか。山口方言の「ユリ」について小川（1978）は、「百合をゴーロと呼ぶのは古語の系統であるがゴーロは大島郡が主体で一部玖珂郡にも残っており、都濃郡にも僅かに伝えられていたが、ゴーラは大島になく玖珂が中心となり佐波郡にまで及んでいる」とある。ユリの別称にゴーロ、ゴーラという呼び方があり、「ささごうら」は「ささゆり」を指していると推察される。「ごうろ」は、百合の古語以外に、『日本植物方言集成』ではオニユリも「ごうろ」として載っていた。

「るり」は、『物類称呼』に「うばゆり」とあり、『日本植物方言集成』では「うばゆり」の方言に「るり山口（大津）」とあるため、「るりのね」は「うばゆりの根」であろう。

『日本国語大辞典』のユリの項目に、ヤマユリがあったが、山口県での使用例はどの辞典類にもなかったため、「ゆり」がユリの総称を指しているのかは明らかにできなかった。

田籠（1990）は、「同じ樹木が地域により異なった呼称のまま報告され、産物帳編集段階でも十分に整理されずに採択された可能性がある」ことを指摘している。『救饑提要』も時間がない中でまとめられたものであるため、同じ植物が混在していることは否定できない。

4.4 山口方言以外の地域で使用例があるものについて

一般的に用いられていない語彙で山口方言にも掲載がなかったものは、「はまごぼう」と「ごはづる」であった。「はまごぼう」は、志州や和歌山県での使用があり、『日本国語大辞典』などからハマアザミだろう。「ごはづる」はどの辞典類にも掲載されていなかったが、「ごばづる」が甲州で使用されおりマツブサを指しているため、マツブサを当てた。『日本大百科全書』には、「根はゴボウのような直根で、食用になるためハマゴボウともいう」とあった。

5. まとめ

以上、布施御牆によってまとめられた『救饑提要』の標準和名及び山口方言について考察した。度重なる天災により困窮した長州藩の対策として救荒植物の一覧が示された。『救饑提要』は、人々に分かりやすく、115語のうち植物に関する100語を取り上げたが、半数以上は山口方言で書かれていた。『諸邑救荒扶食』では、「へんづのは」が「ふじ豆」、「さいかしのは」が「さいかちの葉」と標準和名が記載されていたが、『救饑提要』では、より一般の人に分かりやすく示すために山口方言に言い換えられていた。同じ植物をなるべく口語に近い

語形で掲載し、平仮名で書かれた背景には、庶民の能力に配慮されて示されたのかもしれない。

謝（2021）は、「救荒を目的とした『救荒書』にも二つの側面が見られる。一つは、為政者の 荒政に資するための知識を供給するもので、もう一つは、飢饉の当事者向けの、これから 起こるかもしれない飢饉への対策を提供し、またはすでに飢饉の最中に苦しむ飢民を死の脅威から救い上げるためのものである…中略…本草植物における『救荒』という有用性の発見は、それまで本草学の領域の隙間にあって見過ごされていた多くの植物の再発見、またはそれまで気づかれなかった、その薬用植物以外の効能の再発見を意味していると言えよう」と述べている。越尾（2000）は、食用野草の含有栄養素を調べている。いくつか取り上げると、「イタドリ」は、フラボノイド、ビタミンC，シュウ酸、リンゴ酸、酒石酸、クエン酸を含んでいる。「イノコズチ」は、カルシウム塩、サポニン、アミノ酸、糖を含む。ノビルはカルシウム、リン、鉄、ビタミンCが多いことが示されている。救荒植物にもさまざまな栄養素が含まれているため、飢饉を乗り越えるための有効な手段の一つであろう。

江戸時代の飢饉などの自然災害を背景として、本草学は「救荒」という分野で勢力を伸ばした。そのような流れから、当時小郡宰判であった布施は、防長版の救荒書として『諸邑救荒扶食』を編纂した。嘉永3年（1850年）には、藩主の山野の食用野草を示せという指示のもと『救饑提要』をまとめた。当時飢えに苦しむ人たちへの飢饉対策を示す必要性を感じていたのかもしれない。

本稿では、標準和名と同じ語形で掲載された植物、同一の語形があるが別の植物、別に立項してあるが同じ植物を指している、一つの言葉に複数の植物の呼称があるものという４つのパターンを想定して検討した。標準和名が同じ植物に関しては、「濵ぢさ」は「ツルナ（ハマヂシャ）」、「濵あかざ」は「ハマアカザ」であると明らかになった。別に立項してあるが同じ植物を指している「いのこづち」と「ごしつ」はイノコズチ、「ぎしぎしのは」と「志のは」はギシギシで同じ植物だという解釈を示した。

しかし、提示されたものが何の植物であるのか特定できなかったものもある。田籠（1990）に、「産物資料を方言語彙資料として利用する場合、いくつかの難点が存在する。まず、文献資料の常として、仮名表記でありと漢字表記であるとを問わず、文字で記載されている産物名が実際には何に該当するのかを厳密には決定しがたいことである。…中略…また、産物帳そのものが現在の図鑑類のように厳密な分類と整理の結果えない事に起因する難点がある」としている。特に方言形が多いものは特定することが難しい。同時代の山口県内の資料を、より精査していく必要がある。

6. 今後の課題

本稿では、『救饑提要』に挙げられた植物名を標準和名によって比定する作業を行った。海産物語彙については、次稿の課題としたい。海産物は瀬戸内海と日本海では異なる可能性も高く、他の地域の救荒書と比較分析することで、他の地域と違い三方を海に囲まれた長州藩ならではの救荒食の特徴が見いだせるかもしれない。

山口県内の資料である『諸邑救荒扶食』や『両国本草』の救荒食とも比較することで、『救饑提要』では、なぜこの115語を選定したのか検討し、他の文献における救荒植物の扱われかたを明らかにしていきたい。

参考文献

有元光彦編（2017）『山口県のことば』、明治書院
鋳方貞亮（1977）『日本古代穀物史の研究』、吉川弘文館
石川卓美（1976）『山口県近世史研究要覧』、マツノ書店
臼井伸二・木村浩（2003）「裸麦畑のスズメノカタビラおよびカズノコグサに対する数種除草剤の効果」『愛媛県農業試験場研究報告』37号、pp.40-42、愛媛県農業試験場
遠藤吉三郎（1994）『海産植物学』、成山堂書店
大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図－分布図で見渡す方言の世界－』、朝倉書店
大場秀章編著（2009）『植物分類表』、アボック社
岡　国夫他（1972）『山口県植物誌』、山口県植物誌刊行会
小川五郎（1978）「山口縣植物方言集」「山口県植物方言集拾遺」『防長動植物方言考』、マツノ書店
小郡町史編纂委員会（1979）『小郡町史』、小郡町
金井紫雲（1946）『芽の味覚』、芸艸堂出版部
川名瑞希（2022）「資源観にみる暮らしと認識の変容：ヒガンバナの利活用を事例に」『常民文化』45号、pp.31-60、成城大学常民文化研究会
近世歴史資料研究会編（2002）『近世産物語彙解読辞典』、科学書院
九里聡雄（1973）『食用野草』、八坂書房
越尾淑子（2000）「野草の食べ方」『東京家政大学博物館紀要』第5集、pp.95-110、東洋家政大学博物館

五島淑子（1990）「天保期長州藩における食料と栄養―『防長風土注進案』の分析を通じて―」『日本家政学会誌』41巻12号、pp.1169-1178、日本家政学会
佐合隆一（2012）『救荒雑草－飢えを救った雑草たち』、全国農村教育協会
重本多喜津編（1937）『防長方言資料第1輯　長門方言集』、防長文化研究会発行
篠木れい子（2007）「ヒガンバナの謎と方言－花の生活文化史－」『日本語学』第26巻第1号、pp.61-69、明治書院
謝蘇杭（2021）「幕末の救荒実践としての実学的本草学：伊藤圭介と岩崎灌園の救荒実践を中心に」『千葉大学人文公共学研究論集』42号、pp.69-82、千葉大学大学院人文公共学府
小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典第2版』、小学館
小学館編（1994）『日本大百科全書』小学館
尚学図書、佐藤亮一、徳川宗賢編（1989）『日本方言大辞典』、小学館
田籠博（1990）「『周防産物名寄』の方言語彙　18世紀の周防方言と『中国五県言語地図』」『島根大学法文学部紀要　文学科編』第14号-Ⅰ、pp.49－71、島根大学法文学部
田村哲夫（1981）「長州萩藩当職当役加判衆一覧　付、参勤帰国動静一覧」『山口県文書館研究紀要』8号、pp.89-113
虎尾俊哉（2017）『延喜式 下』、集英社
中西弘樹（2018）『日本の海岸植物図鑑』、トンボ出版
中野喜久子（2000）「近世の飢饉」『みねぶんか』第31号、pp.23－28、美祢市郷土文化研究
二階堂整（1989）「小野蘭山自筆稿本『伊呂波別動植物名彙』について―方言資料としての価値－」『語文研究』66/67、pp.98-110、九州大学国語国文学会
日本語学会（2018）『日本語学大事典』、東京堂出版
農林水産省編（2022）『食料・農業・農村白書令和4年度版』農林統計協会
萩市史編纂委員会（1983）『萩市史』第1巻、pp.890-904、萩市
広田暢久（1974）「毛利家編纂事業史（其の1）『山口県文書館研究紀要』3号、pp.25-47
前田桂子（2020）「向井元升著『庖厨備用倭名本草』中の方言リスト」『人文科学』第86号、pp.1-14長崎大学教育学部
見明長門著、岡国夫・三宅貞敏補（1999）『山口県の植物方言集覧』、里山自然誌の会
溝田浩二（2015）「救荒植物を利用した食教育・環境教育・防災教育の可能性」『宮城教育大学環境教育研究紀要』第17巻、pp.5-11、宮城教育大学環境教育附属実践研究センター
三輪為一（1938）『舊萩藩非常用貯蓄金穀』、防長文化研究會
邑田仁（2014）「植物の学名はなぜ変わる―APG分類体系による科名の変更」『日本植物園協会誌』49号、pp.7-10、日本植物園協会
邑田仁・米倉浩司（2017）『新分類　牧野日本植物図鑑』、北隆館
村田峯次郎編、布施御牆著（1891）『長周叢書15　救饑提要・童子先誦・他所問答』、マツノ書店
森田潤司（2010）「季節を祝う食べ物（1）新年を祝う七種粥と小豆」『同志社女子大学生活科学』44号、pp79-83、同志社女子大学
毛利家文庫（1850）『諸沙汰物御書渡類』4巻　山口県文書館所蔵
毛利家文庫（戦前）『雑集』山口県文書館所蔵
八坂書房編（2001）『日本植物方言集成』、八坂書房
山口県立山口博物館編（1993）『ふるさと山口江戸時代の動植物図』、山口県立山口博物館
山口県文書館編（1964）『防長風土注進案　第14巻　小郡宰判』、マツノ書店
山口県文書館編（1983）『防長風土注進案　第14巻　小郡宰判』、マツノ書店
山口県薬剤師会編集委員会（1993）『やまぐちの薬草』、山口県薬剤師会
山口県薬剤師会編集委員会（1993）『やまぐちの薬草カラー図鑑』、山口薬剤師会
山中六彦（1975）『山口県方言辞典』、マツノ書店
山本淳（2014）「方言資料としての『かてもの』と『飯粮集』」『山形県立米沢女子短期大学　研究紀要』第50号、pp.5-22、山形県立米沢女子短期大学
吉田祥朔（1976）『近世防長人名辞典』、マツノ書店
米倉浩司（2014）「分類体系の変遷とAPG分類体系の説明」『日本植物園協会誌』第49号、pp.11-16、日本植物園協会

両公伝資料（戦前）『忠正公傳』第7編第5章、山口県文書館所蔵

引用サイト

救荒植物データベース https://wetlands.info/tools/plantsdb/salvationplants/　（2022年8月14日参照）
植物和名－学名インデックス　YList http://ylist.info/index.html　（2022年12月26日参照）
国立環境研究所『侵入生物データベース』
https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/DB/detail/80170.html　（2023年1月6日参照）
国立国会図書館デジタルコレクション、小野蘭山、寛政11年（1799年）、『救荒本草記聞』写＜書誌ID:000007282507＞https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2535892　（2022年11月23日参照）
国立国会図書館デジタルコレクション、布施御牆、明治24年（1891年）、「救饑提要・童子先誦・他所問答」『長周叢書15』＜書誌ID：000000427609＞
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/766143　（2022年8月13日参照）
国立国会図書館デジタルコレクション、伊藤圭介、天保8年（1837年）、『救荒植物便覧』西尾氏實洋齋出版＜書誌ID：000010893689＞
https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2537550 （2022年11月23日参照）
国立国会図書館デジタルコレクション、建部由正、天保4年（1833年）『民間備荒録』河内屋八兵衛出版＜書誌ID7324759＞https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2555434?tocOpened=1
（2022年11月23日参照）
国立国会図書館デジタルコレクション、島田智庵他著、『両国本草』写＜書誌ID：000007327375＞https://dl.ndl.go.jp/pid/2536529/1/1 （2022年12月23日参照）
国立国語研究所　『物類称呼データベース』　https://cid.ninjal.ac.jp/brskdb/　（2022年8月15日参照）
山口大学研究プロジェクト『防長風土注進案』産物・産業データベース
https://ds0n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~bochofudo/　（2022年8月15日参照）

表 1.『救饑提要』に掲載された植物の標準和名と Engler 科和名

『救饑提要』の項目名	標準和名	『牧野日本植物図鑑（初版・増補版）』によるEngler 科和名
だいづの葉	ダイズ	マメ科
あづきのは	アズキ	マメ科
いんげん豆のは	インゲンマメ	マメ科
へんづのは	フジマメ	マメ科
そばの皮	ソバ	タデ科
ごまのは	ゴマ	ゴマ科
そら豆のは、とうまめ、てんじくまめ	ソラマメ	マメ科
ははきぎのは	ホウキギ	アカザ科
野ひる	ノビル	ユリ科
野にんじん	カワラニンジン	キク科
すぎな、つくしのめだち	スギナ	トクサ科
ささげのは	ササゲ	マメ科
かきのは	カキ	カキノキ科
にしこぎ	ネズ	ヒノキ科
もちしばのは	ヤマコウバシ	クスノキ科
りようぼうのは	リョウブ	リャウブ科
おほきばのは	アオキ	ミヅキ科
だらのめ	タラノキ	ウコギ科
さいかしのは	サイカチ	マメ科
つつじのは	ツツジ	ツツジ科
むくげのは	ムクゲ	アフヒ科
くこのは	クコ	ナス科
かうぞのは	コウゾ	クワ科
榎の木のは　實	エノキ	ニレ科
きりのは	キリ	ゴマノハグサ科
濵ぢさ	ツルナ（ハマヂシャ）	ツルナ科
いたどり	イタドリ	タデ科
濵あかざ	ハマアカザ	アカザ科
はままつ	マツノキソウ	アカザ科
はぜな	サギゴケ	ゴマノハグサ科
はながら	ツユクサ	ツユクサ科
はまごぼう	ハマアザミ	キク科
はまひらな	ハマサジ	イソマツ科
ほうこぐさ	ハハコグサ	キク科
とりのした	ノミノツヅリ	ナデシコ科
	ノミノフスマ	ナデシコ科
	ユキノシタ	ユキノシタ科
おばこ	オオバコ	オオバコ科
いのこづち	イノコズチ	ヒユ科
	ヌスビトハギ	マメ科
	ハコベ	ナデシコ科
かつら菜	シオデ	ユリ科
おんな草	ボタンボウフウ	カラカサバナ科
川がらし	ミズタガラシ	ジフジバナ科
いそな	シバナ	ヒルムシロ科
ががいも	ガガイモ	ガガイモ科
つは	ツワブキ	キク科
ねこのみみ	ミミナグサ	ナデシコ科
くわんぞう	カンゾウ	マメ科
くずのは　ね	クズ	マメ科
ゆきのした	ユキノシタ	ユキノシタ科
山ごぼうのは	ヤマゴボウ	ヤマゴボウ科
やぶそば	オドリコソウ	クチビルバナ科
志のは	ギシギシ	タデ科
げんげ	ゲンゲ	マメ科
ふぢのは	フジ	マメ科

すいば	スイバ（スカンポ）	タデ科
ごはづる	マツブサ	モクレン科
あぜこし	シロネ	クチビルバナ科
こごめぐさ	シジミバナ	イバラ科
あしたば	アシタバ	カラカサバナ科
ぎぼうし	ギボウシ	ユリ科
こうぞな	コウゾリナ	キク科
にれの根かはは　小ねり	アキニレ	ニレ科
ちもとこ　根　は	ノワケギ	ユリ科
ゑんみのね	アマドコロ	ユリ科
ささごうらのね	ササユリ	ユリ科
ぎわね	クログワイ	カヤツリグサ科
ほどのね	ホド・ホドイモ	マメ科
志ろうのね	カラムシ	イラクサ科
もめらのね	ヒガンバナ	ヒガンバナ科
	スルボ（ツルボ）	ユリ科
	ノビル	ユリ科
きりのミ	キリ	ゴマノハグサ科
かたぎのミ	カシ	ブナ科
夏はぜのミ、犬きず、狐のきず	ナツハゼ	ツツジ科
くにぎのみ	クヌギ	ブナ科
ひよぐり	ドングリ	ブナ科
ぐみ	グミ	グミ科
くわのみ	クワ	クハ科
まつぐいめ	アキグミ	グミ科
	マツグミ	ヤドリギ科
	ヤドリギ	ヤドリギ科
いちご　土いちご	ナワシロイチゴ	イバラ科
濵ゑんどうのみ	ハマエンドウ	マメ科
からすうり	カラスウリ	ウリ科
たみのの實	ムツオレグサ	ホモノ科
あけび	アケビ	アケビ科
冬あけび	ムベ	アケビ科
志ようびのみ	ヤブカンゾウ	ユリ科
ひらくさのみ	スズメノテッポウ	ホモノ科
ささのみ	ササ	ホモノ科
すずめの米のみ	コメガヤ	ホモノ科
たぶの木のみ	タブノキ	クスノキ科
びわのは　皮	ビワ	イバラ科
ぎしぎしのは	ギシギシ	タデ科
あざみのは　ね	アザミ	キク科
すいば	カタバミ	カタバミ科
ゆり	ユリ	ユリ科
むくのみ	ムクノキ	ニレ科
いわしやかずのは、かさな	ゴンズイ	ミツバウツギ科
いもぎのは	タカノツメ	ウコギ科
	コシアブラ	ウコギ科
ところ	トコロ（オニドコロ）	ヤマノイモ科
	ガガイモ	ガガイモ科
	ムカゴ	
ごしつ	イノコズチ	ヒユ科
うしのひたいぐさ	イヌビワ	クワ科
るりのね	ウバユリ	ユリ科
はうくりのね	シュンラン	ラン科
ごうろのね	オニユリ・ユリ	ユリ科

1）ムカゴは植物の栄養繁殖器官の一つである。

2）公益財団法人高知県牧野記念財団と株式会社北隆館作成した作成した『牧野日本植物図鑑』（1940）と『同増補版（訂正版）』（1956）の全頁が掲載されたデータベースを使用した。 http://www.hokuryukan-ns.co.jp/makino/

表２. 同時代の主要文献及び現代の辞典類における掲載状況

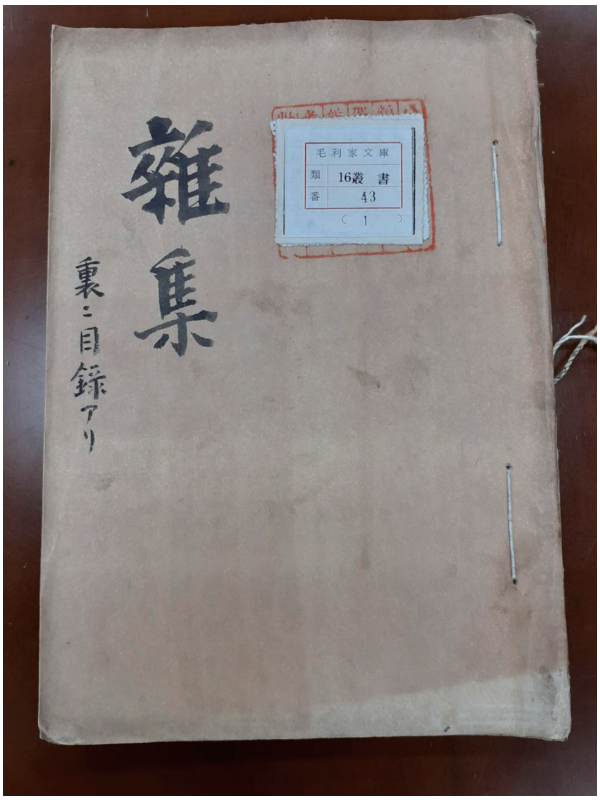
『救餓提要』	標準和名	同時代の防長の文献における名称		近世の方言辞書	中央語や他方言の文献における名称		
		長防産物名寄名彙(長門)(1736)	長防産物名寄名彙(周防)(1736)	物類称呼(1775)	日本国語大辞典第2版	日本方言大辞典DB	日本植物方言集成
だいづの葉	ダイズ				だいず		
あづきのは	アズキ	赤小豆	赤小豆		あずき		
いんげん豆のは	インゲンマメ	いんげんまめ　赤白	いんげん豆		いんげんまめ		
へんづのは	フジマメ	扁豆　へんつ　八升まめ　黒白斑	へんつ　八升まめ　ひらとうまめ		植物「ふじまめ(藤豆)」の異名。		
そばの皮	ソバ				そば		
ごまのは	ゴマ						
そら豆のは、とうまめ、てんじくまめ	ソラマメ			東国にて・そらまめ 西国にて・たうまめ 中国にて・てんぢくまめ	そらまめ		とーまめ(山口)、てんじくまめ(山口)
ははきぎのは	ホウキギ				ははきぎ		ははきぎ（長州・防州
野ひる	ノビル	のびる	のひる	のびる	のびる		
野にんじん	カワラニンジン		やぶにんじん　にがな　いぬにんじん のにんじん		植物「やぶじらみ(藪蠹)」の異名。		
すぎな、つくしのめだち	スギナ			東国にて・つくしともいふ	すぎな・つくし		つくし山口(玖珂・都濃・美濃)
ささげのは	ササゲ	大角豆	大角豆		ささげ	植物　いんげんまめ(隠元豆)	
かきのは	カキ				かき		
にしこぎ	ネズ		にしこぎ　他邦ニねずみのふん			植物　ねず(杜松)	にしこぎ(防州)
もちしばのは	ヤマコウバシ				やまこうばし(山香)	植物　やまこうばし(山香)	もちしば(周防)
りようぼうのは	リョウブ	りやうぼう	りやうぼう				りょーぼ(山口)
おほきばのは	アオキ						おーきば(山口)
だらのめ	タラノキ	だら　すみたら	だら　すみたら　とりとまらず		たらの木		だら(山口)
さいかしのは	サイカチ	さいかし	さいかし	さいかしは関東にてさいかち	「さいかち(皂莢)(1)」に同じ		さいかし
つつじのは	ツツジ	つつじ	つつし　大小きりしま		つつじ		
むくげのは	ムクゲ	むくけ	むくけ	東国にて・はちすと云 京江戸共に・むくげと云	むくげ		
くこのは	クコ	くこ	くこ		くこ		
かうぞのは	コウゾ	かうそ	かうそ　かちかうそ		かじのき(梶の木)		
榎の木のは　實	エノキ	えのき	えのき		えのき		
きりのは	キリ				きり		
濵ぢさ	ツルナ(ハマヂシャ)	はまぢさ	はまぢさ　はまあかさ			植物　はまちしゃ【浜萵苣】	はまじしゃ山口(防府市)
いたどり	イタドリ	いたとり	いたとり		いたどり		
濵あかざ	ハマアカザ	あかさ	あかさ　あをあかさ　はまあかさ のあかさ		植物「つるな(蔓菜)」の異名。		はまあかざ(周防)
はままつ	マツノキソウ	はままつ　まつの木くさ	はままつ　まつな　まつのきくさ		まつのきそう(松木草)	植物　まつのきそう(松木草)	
はぜな	サギゴケ				植物「さぎごけ(鷺苔)」の異名。		あぜな(防州)
はながら	ツユクサ	あをはな　はなから	はなから　つゆくさ　かまつか かめがう		植物「つゆくさ(露草)」の異名		はながら(大島・玖珂・熊毛・厚狭・豊浦・阿武)
はまごぼう	ハマアザミ	はまごぼう			はまあざみ(浜薊)	はまあざみ(浜薊)	はまごぼー(志州波切　和歌山(西牟婁・東牟婁)
はまひらな	ハマサジ		はまひらな				
ほうこぐさ	ハハコグサ	ははこぐさ　もちくさ　おおもちくさ	はうこくさ　のごうし もちくさ　とのさまくさ		植物「ははこぐさ(母子草)」の異名。		ほーこぐさ(播州姫路)
とりのした	ノミノツヅリ	こめな　ここめくさ	とりのした　こごめひづり ほとけのひつり　こめな　こめくさ				とりのした防州
	ユキノシタ						とりのした山口(都濃)
	ノミノフスマ				漢名天蓬草で、雀舌草は中国産の 同属の植物の名。		
おばこ	オオバコ	をはこ　しゃせん	をばこ　大小2種		植物「おおばこ(大葉子)」の異名。	植物　ぎぼうし(擬宝珠)。	おばこ
いのこづち	イノコズチ	こしつ　いのこつち　つちな	こしつ　いのこつち　つちな		⇔ごしつ		
	ヌスビトハギ						
	ハコベ						

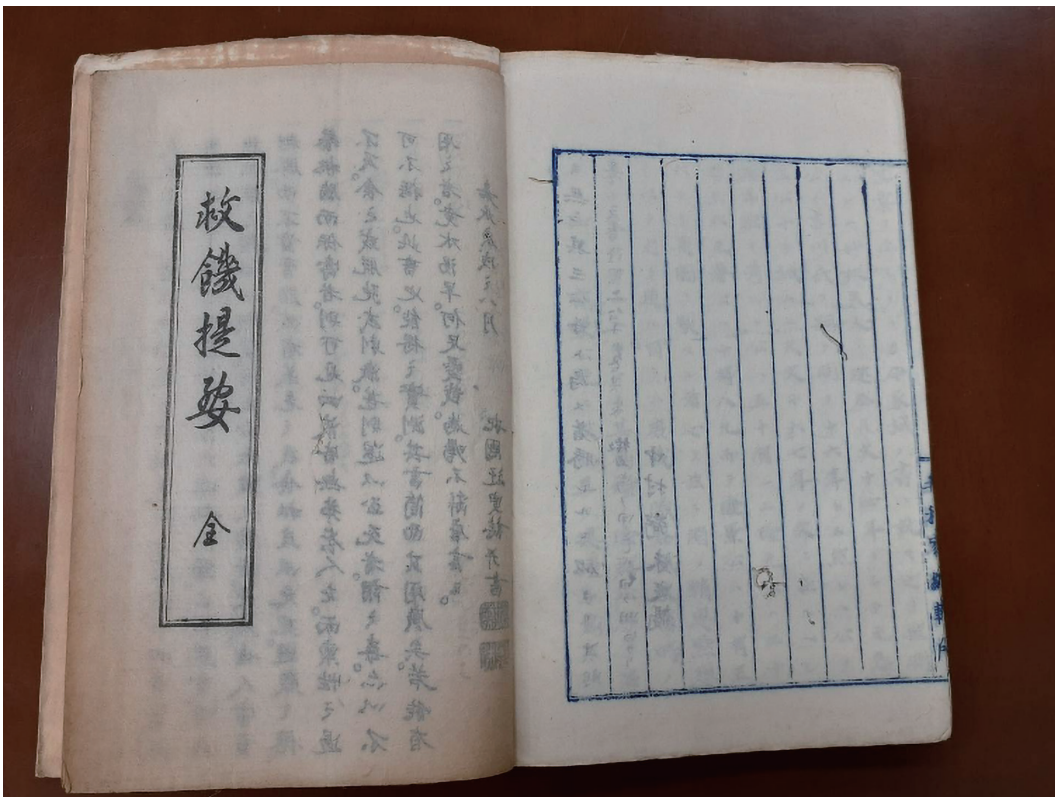
かつら菜	シオデ	かつら				植物 しおで(牛尾菜)。	
おんな草	ボタンボウフウ	をんなくさ まつな					おんなくさ 長州 防州
川がらし	ミズタガラシ				かわがらし	みずたがらし(水田芥子)	
いそな	シバナ				いそな	海岸に生える食用になる草	
ががいも	ガガイモ				がが-いも【蘿藦)	山の芋の葉のわきの芽。むかご	
つは	ツワブキ	つわ	つわ	つは〇江戸にて・つはぶきと云 大和にて・たからこと云	つわぶき		つわ長州・防州 山口(厚狭・大津)
ねこのみみ	ミミナグサ	ほとけのみみ ねこのみみ	みみな ほとけのみみ ねこのみみ		植物、みみなぐさ(耳菜草)、 ゆきのした(雪下)		ねこのみみ長門 周防
くわんぞう	カンゾウ	くわんぞう ささな ろんごくさ	くわんぞう あふぎな わすれくさ かんぞうな ありあけ(一重)		かんぞう(甘草)マメ科の多年草		かんぞー山口(美祢・佐波・阿武)
くずのは ね	クズ				くず		
ゆきのした	ユキノシタ	きんきんそう	きんぎんそう ゆきのした きんぎいす きじんそう		ゆきのした		
山ごぼうのは	ヤマゴボウ	やまこほう	やまこぼう				
やぶそば	オドリコソウ	やぶそば	やぶそば をとりくさ			おどりこそう(踊子草)	やぶそば(築前)
志のは	ギシギシ	しのば	しのは、ぎしぎし、わうじ				しのは 長門
げんげ	ゲンゲ		げんげ	げんげ〇畿内にて・げんけばなと云 江戸にて・れんげはな	げんげ		げんげ 山口(大津)
ふぢのは	フジ				ふじ		
すいば	スイバ	すいは	すいは	すいば〇畿内にて・すいどうと云 江戸にて・すかんぼと云 西国にて・すいば			
ごはづる	マツブサ						ごばづる(甲州)
あぜこし	シロネ						
こごめぐさ	シジミバナ	ここめばな ここめくさ	ここめはな はぜ		のみのふすま(蚕衾)しじみばな(蜆花) きじかくし(雉隠)みぞかくし(溝隠)	植物 しじみばな(蜆花)	こごめぐさ(長門・周防)
あしたば	アシタバ				あしたば		
ぎぼうし	ギボウシ	きほうし たきな	きぼうし たきな			植物 ぎぼうし(擬宝珠)。	
こうぞな	コウゾリナ	かうぞり	かうぞり、かうぞな				
にれの根かはは 小ねり	アキニレ	にれ こねり	にれ こ子り		にれ		
ちもとこ 根 は	ノワケギ		のわけき ちもとこ			野分葱	ちもと山口(玖珂)
桑んみのね	アマドコロ	いすい えんみ	いずい えんみ				えんみ 周防 長州
ささごうらのね	ササユリ	ささごうら					
ぎわね	クログワイ					植物「くろぐわい(黒慈姑)」の古名	
ほどのね	ホド・ホドイモ						
志ろうのね	カラムシ						しろー山口(大島)
もめらのね	ヒガンバナ				のびる(野蒜)、つるぼ(蔓穂)、 むくげ(木槿)、ひがんばな(彼岸花)		もめら山口(厚狭・大島・熊毛)
	ツルボ	もめら	もめら つるぼ さんだいがさ				もめら 長門 周防 山口(厚狭)
	ノビル					野蒜	もめら山口(豊浦・厚狭)
きりのミ	キリ				きり		
かたぎのミ	カシ				かたぎ	どんぐり	かたぎ(厚狭・玖珂)
夏はぜのミ、犬きず、狐のきず	ナツハゼ		なつはぜ いぬきず きつねのきず つぶりはげ		なつはぜ	植物なつはぜ(夏黄櫨)。	いぬきず (周防) きつねのきず(周防)
くにぎのみ	クヌギ	くにぎ ははそ	くにぎ くぬき ほうそ うづな		植物「くぬぎ(橡)」の古名。		くにぎ 山口
ひよぐり	ドングリ					橡(とちのき)、櫟(くぬぎ)などの実。どんぐり。	ひよぐり 周防 山口
ぐみ	グミ	ぐみ	くいめ		ぐみ		
くわのみ	クワ	くわ	くわ よもきくわ いらくわ(たにくわ)		くわ		
まつぐいめ	アキグミ	秋くみ	あきくみ				まつぐいめ 山口(玖珂)
	マツグミ		松ニ生スルヲまつぐいめ			植物 まつぐみ(松茱萸)	まつぐいめ 周防 山口
	ヤドリギ						

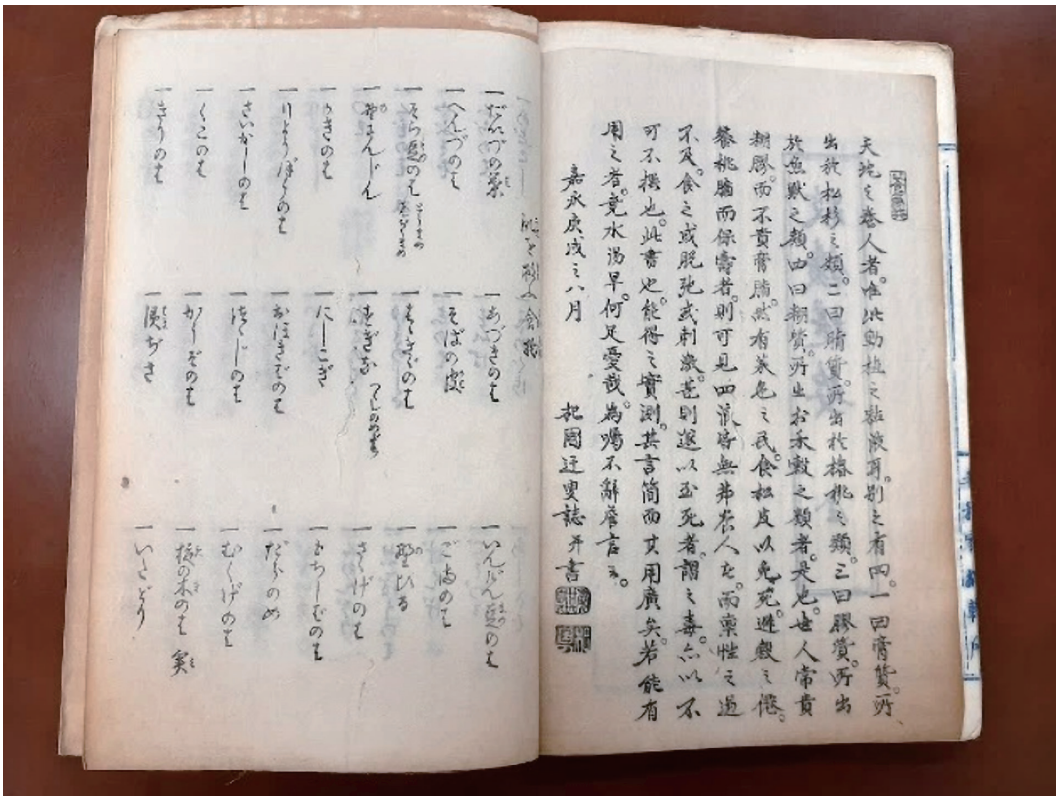
いちご　土いちご	ナワシロイチゴ		つちいちご		いちご		つちいちご　山口(大津)
濱ゑんどうのみ	ハマエンドウ	はまえんどう			はまえんどう		
からすうり	カラスウリ	からすうり	からすうり　やまうり		からすうり		
たみのの實	ムツオレグサ	みのくさ　みのごめ	たみの　こい子				
あけび	アケビ				あけび		
冬あけび	ムベ		むべ　ふゆあけひ			植物むべ(郁子)	ふゆあけび　周防
志ようびのみ	ヤブカンゾウ	しゃうひ	せうび　いばら　数種				しょーび　防州
ひらくさのみ	スズメノテッポウ	ぶえ　周防ニひらくさ			ひらくさ		
ささのみ	ササ				ささ		
すずめの米のみ	コメガヤ						
たぶの木のみ	タブノキ	たぶ　葉ノ長キヲはなか	たぶ　たまのき　たうづれ　たう子り		たぶのき		
びわのは　皮	ビワ	びわ	びわ		びわ		
ぎしぎしのは	ギシギシ				ぎしぎし		
あざみのは　ね	アザミ	あさみ　おにあさみ	あさみ　おにあさみ		あざみ		
すいば	ムラサキカタバミ				(1)いたどり(虎杖)。ぎしぎし(羊蹄)		すいば　山口(熊毛)
	イタドリ					すいば(都濃・佐波)	すいば　山口(都濃・佐波)
	ギシギシ					すいば(美祢・大島)	すいば　山口(大島・玖珂・熊毛・美祢・大津・阿武)
ゆり	ユリ	ゆり　がうら　ささかうら　にがうら	ゆり　がうら　ささゆり		ゆり		
むくのみ	ムクノキ	むく	むく　雌雄		むくのみ		
いわしやかずのは、かさな	ゴンズイ	いわしやかす	いわしやかす　かさな		植物「どくうつぎ(毒空木)」の異名)、 ごんずい(権萃)	植物ごんずい(権萃)	いわしやかず　山口
いもぎのは	タカノツメ	いもき	いもき		たかのつめ(鷹爪)、	(1)たかのつめ(鷹爪) (2)こしあぶら(漉油)	いもぎ　山口
	コシアブラ				こしあぶら(漉油)		いもぎ　山口
ところ　※『救荒雑草』引用確認	オニドコロ	ところ	ところ　をにところ　きところ		植物「おにどころ(鬼野老)」の別名。		
	ガガイモ					植物　ががいも(蘿藦)	ところ　山口(佐波)
	ムカゴ						
ごしつ	イノコズチ		こしつ　いのこつち　つちな		植物「いのこずち(牛膝)」の漢名。		
うしのひたいぐさ	イヌビワ	いちぢく	いちぢく　うしのひたい うしのしたあぎ　子やすのき うしのした		いぬびわ(犬枇杷)、)いちじく(無花果)		
るりのね	ウバユリ			かたかご[かたかご古名也今かたくりと云] 〇奥州南部にて・かたくりと云 江戸にて・かたくり又うばゆり又ぶんだいゆりと云京にて・はつゆりと云			るり　山口(大津)
はうくりのね	シュンラン						
ごうろのね	オニユリ・ユリ						ごーろ　防州

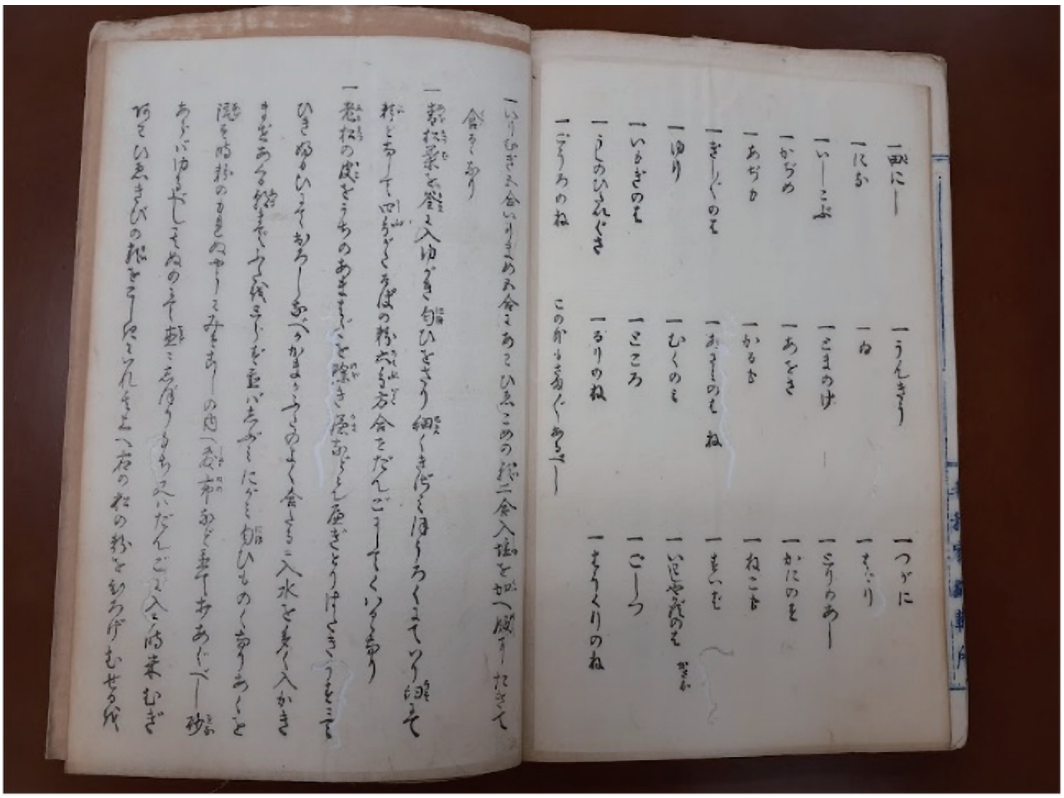
【添付資料１】　『諸沙汰物御書渡類』 山口県文書館蔵（筆者撮影）

【添付資料２】「救饑提要」『雑集』　山口文書館蔵（筆者撮影）

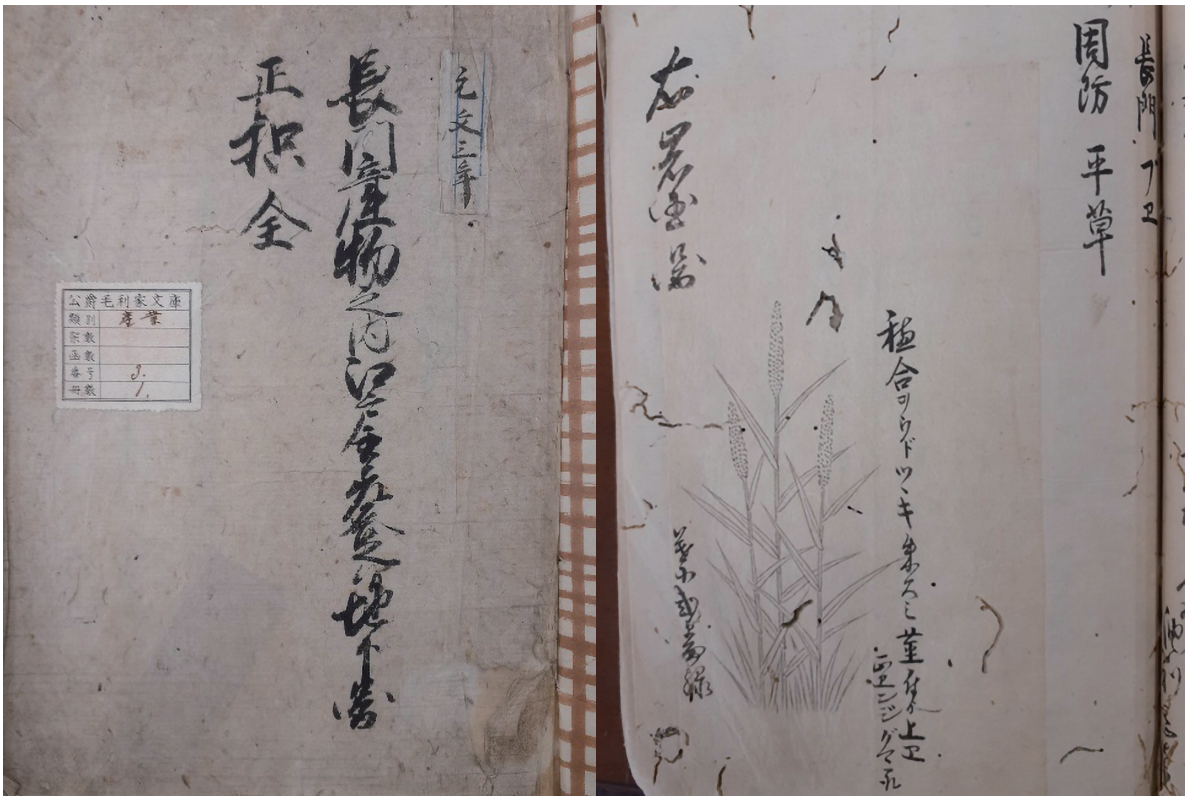



救饑提要
全


凡
天地之巻人者。在此動植之物産耳。別之有四。一曰膏質。所出於松杉之類。二曰精質。所出於梅桃之類。三曰膠質。所出於魚獸之類。四曰糊質。所出於禾穀之類者。是也。世人常貴糊膠。而不貴膏脂。然有養色之民。食松皮以免死。避穀之惑。餐桃脂而保壽者。則可見四質皆無非若人之所宜。而棄性之逆不及。食之或脱死或刺激。甚則遂以致死者。謂之毒。亦以不可不擇也。此書也。能得之實測。其言簡而其用廣矣。若能有用之者。竟水湯早。何足愛哉。為嘱不辭序言。
嘉永庚戌之八月　北國迂叟誌并書
一だんごの類
一へんづのこ
一そら豆のこ
一ぎまんじん
一うきのこ
一りょうぼくのこ
一さいかーのこ
一くこのこ
一さうのこ
一あづきのこ
一そばの粉
一もろこしのこ
一ちぎかてしのこ
一ハーこぎ
一おほきでのこ
一ぢくーのこ
一かーぞのこ
一ぼちぎ
一いんげんまめのこ
一ごまのこ
一ひえ
一さくげのこ
一ふちーでのこ
一だーのめ
一むくげのこ
一松の木のこ　矣
一いさどう



【添付資料３】　『長門国産物之内江戸被差登候地下図正控』 より「平草」山口県文書館蔵（筆者撮影）



謝辞

本論文を作成するにあたり参考資料を提供して下さった安渓遊地先生、安渓貴子先生、二階堂整先生には感謝申し上げます。また山口県文書館関係者の方々には本研究遂行にあたり多大なご助言、ご協力いただきました。ここに深謝の意を表します。